

## 動物の昔話における日本とインドネシアの文化比較 —日本語学習者の日本文化理解のために—

バリタ・マシリアー\*

(2016年3月3日受理)

Balita Masyri'ah

Cultural Comparison between Japan and Indonesia through the Folktales of Animals

— For the understanding of Japanese culture by Japanese language learners —

### 1. はじめに

昔話というのは地域の人々に流行している話ということである。昔話の始めは、「昔むかし、あるところに・・・」という文言が一般に書いてある。筆者にとっては、この文言に強い感想を持っている。インドネシアでも同じように言い、子供のころを思い出すからだ。各国でも面白い昔話があると思う。昔話から学べることが多くあることに気がついた。例えば精神のこと、仕来りのこと、哲学などである。その昔話の意味を深く理解しようとする場合は、言葉だけではなく、昔話を生み出した文化の影響を考えることが必要である。言葉と文化の両方を視野に入れるとき、両者の深い関係の領域には、どのようなことが関わってくることになるだろうか。言葉の意味から文化までを学問分野とすることが可能である。まれには多く話が類似点を持っているが、多くは別の方面に成長している。一般的に昔話は、深い意味を持っているので、そこから、生活様式、感情、人生、自然環境などを簡単に学ぶことができると思う。

日本では、昔話に関して柳田国男の著作が非常に人気である。例えば『遠野物語』、『日本の昔話』などである。昔話の主人公には、一般的に良い性格と悪い性格がある。主人公は、必ずしも人間で

はなく、動物とか魂の場合もある。動物なら、狐とサルはよく出てくる。その二つの動物は、悪い性格を持っている。いつも他の動物を化かして、狡い。インドネシアの昔話にも、そのような動物がいる。カンチルとサルは、一般的に悪い性格を持っている動物である。カンチルという動物はネズミ鹿である。頭が良いが、友だちをよくバカにしている。さらに、インドネシアと日本は遠く離れていても、いくつかの類似点を持っているので、インドネシアと日本昔話を比較研究することができる。

実際に、インドネシアと日本の昔話の比較研究がいくつか行われている。例えば、セマラン・ディポネゴロ大学のユリアニ・ラフマーの修士論文、『Timun Emas (Indonesian Folktale) and Sanmai no Ofuda (Japan Folktale) (Comparative Study of Narrative Structure and Cultural Background)』である。その先行研究は、インドネシア昔話「ティムン・マス」と日本昔話「三枚のお札」を比較する研究であった。ユリアニ・ラフマーは日本の伝説に関して、非常に興味を持っており、特に日本の昔話を研究していた。様々な日本の昔話を読んだり聞いたりするためには、関連知識として古代の言語の多様性だけでなく、日本社会、日本文化

\*平成27年度 岩手大学教員研修留学生

に関する知識を増やすことも必要だと言われている。

その上で、日本の昔話にインドネシアの昔話と同じようなテーマがいくつかあることを見つけている。その様々な類似の話の中から、日本昔話『三枚のお札』という話とインドネシア昔話『ティモン・マス』という話を選択している。この研究の中で、三つの課題が指摘されていた。すなわち、1) 両国の昔話中の物語構造を明らかにすること、2) 両国の昔話中の文化的要素を明らかにすること、3) 両国の昔話中では類似点と相違点があることを明らかにすることであった。両国の文化作品は異なる言語なので、その三つ課題を解決するため、比較文学アプローチ、文化的アプローチ、A.J. グレマスのモデルによる構造主義アプローチが使われていた。研究結果においては、物語の構成と文化的要素のいくつかの部分が同じことを見出されたが、両国の昔話の筋書きの特徴と話の生まれた社会生活の違いを見ると、互いに影響を与えてはいないと結論されている。

本研究においても、日本昔話とインドネシア昔話を対照研究することを目的としている。ユリアニ・ラフマーと同じように、筆者も昔話に関して強い興味を持っている。しかし、筆者が様々な話を読んだり学んだりするときに、昔話の主人公として様々な動物があることが気になっている。やはり昔話は、読者に影響を与えることができると思うので、主人公の動物がどのように読者に想像されているのかを一つ目の課題とする。そして、異なる文化作品なので、どのような比較分析ができるかを二つ目の課題とする。

その上で、その主人公の行動は、分析表の中で良い行動と悪い行動の二つに分けて分類し、その分布から分析して結論を導く。併せて、この研究は、インドネシアの日本語学習者が両国文化の違いを理解する実践的学習に役に立つと筆者は考える。

インドネシアと日本は遠く離れていても、いくつかの類似点のある昔話をもっている。研究課題を整理すると、以下の通りである。

- ①昔話の中で、悪い性格と良い性格は、どのように想像されているか。
- ②インドネシアの昔話と日本の昔話の類似点と相違点は、どのような比較分析できるだろうか。

具体的な研究方法として、まず日本昔話とインドネシア昔話の情報源を探す。次に、様々な両国の昔話を整理する。そして、両国の昔話から、動物の主人公として人気の高い、カンチル、狐、田螺、猿を取り上げ、主人公の行動を分析表で良い行動と悪い行動に分類・分析し、結論を導く。本研究では、様々なメディアソース（日本昔話の図書、インターネット）等を使っているが、重要なソースは柳田国男の著作、東京外国語大学のウェブサイトを、世界神話伝説大系第15巻である。

## 2. 日本とインドネシアの昔話における性格分析の具体例

私たちの日常生活の中で、「あの子は性格がいいね。」という褒める言葉がよく聞かれる。逆に「ほら、見て、あの子はだらしなくて、友だちに意地悪して、悪い性格だね。」と、まれにはそんなことも聞いたことがあるかもしれない。良い性格を持っている人は心が豊かな人だと言われている。悪い性格を持っている人は道徳性がないと、しばしば言われる。良い性格と悪い性格というのは何だろう。様々な視点があるかも知れない。

筆者にとって良い性格というのは、周りのために役に立つ積極的な行動を持っていることである。一般的な定義を Wikipedia により引用すると、性格という用語はキャラクターの訳語として心理学で用いられるようになった。ゴードン・オールポートが述べているように、キャラクターという単語には価値的な意味合いが含まれている。一方で性格という用語には価値的な意味合いが薄いということもあり、日本語の「性格」と「人格」という用語は混乱しやすい。気質から作られる行動や意欲の傾向が性格とよばれる。性格とよく似た言葉に人格があるが、人格には社会的もしくは論理

的な内容が含まれ、性格より範囲が広い。つまり、良い性格というのは一般に良い人間の行動の背景にあって、個人に特徴的な行動型や考え方を規定している持続的な態度の系ということになる。逆に、悪い性格というのは社会で受け容れられない行動である。

物語の中では、やはり主人公が必要である。様々な主人公のキャラクターをもとに話が作られ、読者の感想に影響している。もちろん、主人公として良い性格と悪い性格がある。すなわち、主人公のキャラクターの使命は、読者とか子供の感想を形成することであると思う。インドネシアの昔話と日本の昔話の中では、主人公として動物が多い。両国は、やはり異なる自然環境に置かれているので、両国の間で登場する動物も違いがあり、また、共通することもある。両国の昔話の中で、どのような性格が想像されているか、以下に示す通りである。

### 2.1. カンチル

インドネシアにはカンチルという動物がいる。カンチルという動物はネズミ鹿である。鹿に似ているが、体が小さくて無角である。ほっそりした脚で背中が少し曲がっている。体の色は茶色で、頭から尻尾までの長さは20~60センチメートルくらいであり、インドネシアでは一般的な動物であるが、日本には生息していない。昔話の中で、カンチルは一般的に頭が良いが、他人をよく馬鹿にする動物である。例話を挙げると次の通りである。なお、例話に付された「Id」はインドネシア昔話であること、「Jp」は日本昔話であることを、それぞれ示している。



#### Id. ① カンチルとカタツムリ（筆者・高橋ありさ共訳）

むかしむかし、いじわるなカンチルはカタツムリに川岸の近くで会いました。わがままなカンチルは遅く歩いているカタツムリをからかいました。

「おーい、カタツムリ、僕とレースをしよう!!!」とカンチルが言いました。カタツムリは断わろうと思っていましたが、その挑戦を受けました。

二人とも決戦の日を熱い思いで待っていました。カタツムリとお友達はいい戦略を思いつきました。カタツムリはカンチルをだまそうと言いました。カタツムリたちは川岸に一定の距離で並んで、もしカンチルに呼ばれたら、カンチルの前にいるカタツムリが返事をしなければならぬと命令しました。

決戦の日には全ての森の動物たちが見に来ました。カンチルとカタツムリはレースの場に準備していました。

「もうできたぞ」とレース長が言いました。

「はい……」と二人とも答えました。

「じゃ、スタート……」

カンチルとカタツムリはたちまち走り始めました。カンチルは精一杯早く走り出しました。走り過ぎましたから、途中で息が激しくなってきました。カンチルはしばらく止まりました。

「カタツムリ……」と呼んでみました。

「はい、ここにいるよ」とカタツムリはカンチルの前を遅く歩きながら答えました。

カンチルはびっくりして、たちまち精一杯また走り出しました。でも、とても疲れたので、カンチルはまたしばらく休憩したいと思って、カタツムリを呼んでみました。

「カタツムリ……」

「はい……はい……ここにいるよ。カンチル、どうしてだろう今日はちょっと遅いねえ」とカタツムリはカンチルを少しいじめて答えました。カンチルはそれを聞いて、たちまちまた精一杯頑張って走り出しました。そして、息をするのが辛

くなってきたので、カンチルは走るのを諦めてしまいました。皆はとてもびっくりしました。あんなに我がままだったカンチルが、レースでカタツムリに負けてしまったのです。勝ったカタツムリたちは大喜びました。(ジャワ州の話「Cerita dan Dongeng」 <http://guruceritaku.blogspot.jp/2014/09/cerita-kancil-dan-siput.html>)

#### Id. ② カンチル王の巨人退治

ある日カンチル王は、小高い丘にあるプデンの木の下にトラや山羊たちを前にして坐っていました。紅葉した木の葉は王にふさわしい傘のようでした。そこへ見張り役のトラがやって来てひざまずいていました。「王様オオカミがお目にかかりたいそうです。」、オオカミは進み出て、敬礼すると話し始めました。「王様、この森のはずれにとっても野蛮な巨人が住んでいます。ゲルガンという名前で、いつも私たちの平和を乱します。子どもたちは食い殺されるし、家畜は一匹ずつやられるし、田畑はメチャメチャにされるし。ここからやつを追い出す方法はないのでしょうか。王様が引き受けてくださるなら、私たちは王様をこの森全体の王様と認めましょう。」

「明日なんとかしてみよう」カンチルは短く答えました。

翌日、カンチル王はゴムの木の枝を探すと、足で木の皮をむき、ゴム液を出しました。それを頭の髪とヒゲにこすりつけ、綿のようにしました。それから巨人がよく通る所へ行きました。そして道の真中に、穴を掘り始めました。彼は悲しみ嘆くふりをしながら、こんなことをしています。「女房と子どもよ、すぐにここへおいで、一刻も早くだよ。お前たちはこの穴の中で隠れているんだよ。アラーの使いのお告げがあったんだ。もうすぐこの世の終りなんだって。天も地も崩壊するんだよ。早くおいで、ぐずぐずしてるんじゃないよ。早くこの中に入るんだ。」突然地響きがして、巨人が獲物を探しにやってきました。

巨人はカンチルが妻子の名を呼びながらいっ

しょうけんめいに穴を掘っているのに目をとめました。するとカンチルはなおも大きな声で遠くまで聞えるように叫ぶのでした。「おおい、早くおいでよ、お前たち、アラーのお告げがあつてね。この世はもう終りなんだ、いま天が崩れて頭の上に落ちてくるんだから。」

巨人のゲルガシはそれを聞くや、カンチルの所にやってきてたずねました、「おいカンチル、それは本当か？誰がお前にいったんだ？」大きな巨人の声にカンチルはびっくりしたようです。「わしはもう四十年も修行して、髪もヒゲも真白だ。昨日急にアラーが夢に現れてな、この世の終りが近いといったのだ。多分あと一日か二日で、天が崩れてくるだろうよ。信じないなら、空を自分で見てごらんよ。」

巨人は空を見上げました。雲は風に吹かれてあわただしげに動き、まるで壊れそうです。巨人はカンチルにいいました。「わしもその穴に入ってもいいか。」

「まさか、無理ですよ。私の家族にさえまだ小さいのですからね。」

巨人はあわれっぽい声で、「そんなこといわないで、お前の家族と一緒に入れてくれ。わしは場所をとらぬように、うずくまるから。」

「ほんとうに私たちと一緒に入りたいなら、穴を掘るのを手伝ってくださいよ。早く終わるから。」巨人はカンチルに従いました。

穴掘りを終えると、カンチルはいいました。「さあ、終わった。あなたからまず入ってみてください。あなたのほうがわたしより大きいのですからね。それに私の女房と子どもがまだ来ないので、待たなければならぬし。」

巨人はちょっと考えていましたが、「よかろう」といって中へ入りました。

巨人が穴の中に落ち着くと、カンチルは大きな腕環を二つ見せながらいうのでした、「この中に両方の膝とひじを入れてごらん。緊張がとけるおまじないだといって私の母がくれたんだ。あなたはずいぶん堅くなっているようだから。」巨人はいわれた通り両方の膝と肘を大き

な腕環の中に入れました。

するともう身動きができなくなってしまいました。「その腕環を折れるかね」とカンチルがいました。巨人は力いっぱい手足を動かしてみましたがダメです、それどころか腕環はいつそう手足にくいこんできます。あまりの痛さに悲鳴をあげると四方八方に響きわたりました。そしてぐったりと死んだようになってしまいました。

カンチル王はすばやく巨人の頭の上に飛び乗るとこおどりして叫ぶのでした。「おおい、みんな、悪者はここにいるぞ、手足を縛ってやった。首まで地面に埋まっているぞ。もうみんなを悩ますことはない、見に来いよ。」

森中の住人たちがぞくぞくカンチル王のところへやってきました。

そしてものすごく大きくて頑丈な怪物がカンチル王によって捕えられ、地面に頭だけ出しているのを見るとびっくり仰天してしまいました。カンチル王の勇気と力を口ぐちにほめたたえました。巨人の頭の上にいるカンチルの前に巨人退治を依頼したオオカミが進み出て、約束通り、カンチルをこの森を統治する唯一の王として認めると誓いました。犀やヤマアラシ、鹿なども改めてカンチル王の足もとに膝まづくのでした。熊の親分も色とりどりの果物を持って、王に敬意を表しました。(ジャワ州の話、東京外語大学ウェブサイト「インドネシアの部屋」<http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/cerita/index.htm>)

#### Id. ③ カンチルと婚礼の客

ある時、カンチルが明日婚礼があることになっている家の傍を通りかかりました。婚礼支度に疲れた人たちはもうすでに床につこうとしていました。カンチルは皆の寝静まるのを待って、屋根に這い上がって隙間から家の中に下りました。

見ると皿の上に、いろいろな御馳走が用意されてありました。カンチルはそれをすっかり平らげた後、空になった皿の上に、用を足しまし

た。それから台所へ出掛けて行って、家具をすっかりひっくり返しました。彼の両手は煤で真っ黒になりました。かれはとうとう花嫁の寝室に入り込んで、真っ黒になった両手を、花嫁の顔になすりきました。しかし花嫁は眼を覚ましませんでした。そういう風にして、家中の者を皆汚してしまってから、花嫁の隣の部屋に入り込んで、そこに寝ていた婦人の鼻の上に座って、鼻の中へ一発放ちました。

それから再び屋根に駆け上がって、盗んで来た小さな布団の上に座り込みました。臭気が婦人の鼻の中に入ってゆきました。彼女は眼を覚して花嫁の部屋に行きました。花嫁が煤けて真っ黒な顔をしてベッドの上に横たわっているのを見た彼女は、びっくりしてさっそく家中の者を呼び集めました。

いままであんなに美しい朗かな色をしていた花嫁の顔が、真っ黒になっているのを見て、一同の驚き方はたいていではありませんでした。皆には、花嫁が幽霊になったのだとしか考えられませんでした。御馳走を見ると、それがまた汚物になってしまっていますので、みんなの驚きはますます募るばかり、最後に台所へ行って見ると、何もかもひっくり返っています。人々はあきれ返って突っ立っていましたが、ふと気がつく、灰の中に、カンチルが見えました。

人々はさっそくこのいたずら者を探し始めました。けれどもこちらは、誰にも見つからないで、へいきで屋根の上に座っているのです。家中くまなく探しても、悪戯者を見つけることが出来なかったのです、人々は今度は屋根を見上げました。とたんにみんなが、

「あっ」と声を揃えて叫びました。

「あそこにどろぼうがいる。あいつがわたしたちの肉や、御馳走を盗んでしまったのだ！明日は婚礼だというのに、———家には肉一切れもありはしない！」そういって皆カンチルを目掛けて、駆け出そうとしました。

カンチルは、蒲団を投げ落しました。皆はカンチルが落ちて来たのだと思って、そこへ飛ん

で行って見ますと、これはただの蒲団でした。二、三人の男が、堪りかねて、屋根にかけ登って、とうとうカンチルを捕えてしまいました。彼は逃げようとしても、逃げる事が出来ませんでした。下にも上にも人がいたのですから。

「明日はな」と人々は彼を脅かしました。

「明日はな、貴様は悪戯の罰として、殺されるのだぞ」

こうして彼は、籠を被せられて、夜通し泣きじゃくってはいくちもありませんでした。すると偶然、一匹の蛙が彼の近くに寄って来ました。カンチルは蛙に向かって、

「ああ蛙さん、どうかわしを助けておくれ。いますっかり途方に暮れているとこなんだ」といいました。

「君はいったいどうしてそんな目に遭ったのだ？」と蛙が尋ねました。

「実は僕が婚礼の菓子を食ってしまったのだ。そして、捕まって明日は殺される身の上となってしまったのだ」とカンチルが答えました。

すると、蛙はカンチルに教えて、

「明日の朝六時に、皆が君を殺しにやって来たら、体を真っすぐに伸ばして、固くなって寝ていたまえ。そしていまから口のまわりに唾を流しておいて、あすの朝になったら、それが臭くなるようにするのだよ。そうすれば、人間どもは、死んだものと思って、君を森に捨ててしまうに違いない」といいました。

翌朝、人々がナイフを持って、カンチルを殺しにやって来ました。籠のそばまで来ると、その中の一人がいいました。

「やあ、カンチルの寝ざまを見ろ。頭をこうして、足をこうして、ははあ、カンチルはこうやって寝るものかなあ。わしはこれが初めてだ、寝ているカンチルを見たのは」

すると他の人たちが、カンチルをゆすぶって、いいました。

「死んでるのだよ。もう堅くなってる！」

「何？ 死んでる？ いや寝てるだけだ」

それからカンチルは、ひっくり返されたり、

指でつつかれたりしましたが、まるで棒のように堅くなっていました。

人々は顔を見合せて、

「カンチルは死んだのだ。もし生きているなら、もっと体がしなやかなはずだ。そして逃げ出そうとするだろう。ところがこいつはすっかり堅くなっていて、おまけにもう臭いのだからなあ！」といいました。

こうして、彼が死んだことを、疑う者は一人もありませんでした。

「死んだとなりゃあ、もう俺たちに用は無い。死んだ獣を料理して、それをお客に出すという法は無い、と行って、置いても無駄だ。どうせ死んだものなら捨ててしまう方がいい」

人々はこういってカンチルを放り出しました。と、カンチルは素早く飛び上がって、からからと笑って森の中に駆け込みました。カンチルが死んだものとばかり思っていた人々は、さっぱり訳が分かりませんでした。で、家に帰って、留守の人たちに、この顛末を話して聞かせました。

一方、花婿は、自分の花嫁が、幽霊のように見えるということ聞き込むと、両親に向かって、

「婚礼の話は見合せましょうよ。そんな女と結婚するのはごめんです。多分いまに幽霊になるのでしょうか。身受の金は、無駄にしたと諦めた方がよさそうですね」といいました。(西カリマンタン島の話、『世界神話伝説大系第15巻』pp76-80)

## 2.2. 狐

日本の昔話では、キツネは人を化かすいたずら好きの動物と考えられたり、それとは逆に、稲荷神の神使として信仰されたりしている。ただし、インドネシアにはいない動物である。

### Jp. ① 小僧と狐

むかしむかしある山寺に、ずいてんという小僧がありました。和尚様がよそへ行って一人であるすいをしていますと、きっと狐が庫裡の口へ

来て、ずいてん、ずいてんとよびました。あまり憎らしいので本堂の窓へまわって覗いて見ましたら、狐は入り口に背中を向けて立っています。そうして太いしっぽで戸をこすると、ずいという音がする。それから頭を戸にぶつけると、てんという音がするのであります。賢い小僧さんだからさっそく戻ってきて、そっと戸口の脇にきて立っていて、ずいという音がした時がらりと戸を開けますと、てんと戸を叩こうとしていた狐は庫裡の庭へころげこみました。すぐにその戸をしめておいて、棒を持ってきて狐を追かけましたが、そのうちに狐の姿は見えなくなってしまいました。

それから本堂の方へ行ってみますと、いつの間にか本尊のお釈迦様が二つになっていて、どちらが狐のばけたのやら、身分けることができませんでした。なあとそんなことをしたってすぐにわかるさ。うちのご本尊様はお勤めを上げると、舌をお出しになるからまちがいつこはないといって、ほんぽんと木魚をたたいてお経を読んでいますと、いそいで狐のお釈迦様は長い舌を出しました。それではこれからうちの仏様に庫裡の方でお仏供をさしあげましょう。狐がばけたのは残しておいてと言いながら、さっさと台所へ帰ってきますと、あとからにせもの本尊様が、のこのこと歩いて出て来ました。それではまず行水をあげましょうと、土間の大釜のなかへ抱いて入れてしっかりと蓋をして火を焚きました。そうして和尚様の帰って来られるまでに、狐のまる煮をこしらえておいたという話であります。(山形県の話、柳田国男『日本の昔話』pp73-74)

#### JP. ② 狐女房

むかし能登の国の万行の三郎兵衛という人はある晩便所に行って帰って来てみると、部屋に自分の女房が二人おりました。どちらか一人はばけ物にそういないのですが、姿からいうことまでも寸分のちががなく、いろいろ難題をかけてみましたが、双方ともにすらすらと答えるので、どうすればよいのか困っていました。その

うちに一人の方に、ほんのわずかな疑いがあったので、それを追い出してしまっていて一人の方をおきました。それから家が繁昌して二人まで男の子が生まれました。その二人の子がすこし大きくなって家で隠れんぼをして遊んでいて、ふと母親にしっぽのあることを見つけました。正体を見られたからにはもういることができない。

じつは私は狐であったとあって、二人の子を残して泣いて帰って行きました。それから毎年稲のみるころになると、その狐の女房は三郎兵衛の田のまわりを「穂に出いでつづばらめ」と唱えながら歩いたそうであります。そうしてこの家の稲だけは、いつも少しも実が入らぬために、毛見の役人が見に来てかならず年貢を許してくれました。それが刈り取っていえにはこんでくると、後から穂をぬきたしてどこの家よりもよくみのったので、この家のくらしはますます豊かになったということです。(石川県の話、柳田国男『日本の昔話』118-119ページ)

#### JP. ③ 狐の恩返し

とんとむかし、爺様が朝起きて、内庭をはいっていますと、豆が一粒庭のすみどころがっていました。これはもったいないと裏との畠に待っていつてまいておいたところが、やがて芽を出してぐんぐんと大木になり、これは八石まではありませんでしたが、一本の豆の木に豆が一斗も二斗もみのっていたそうです。

ところがある日一匹の狐がやって来まして、一度にその豆をぺろりと食べてしまいました。老人は真赤になって怒って、せっかくおれが丹精をしてくった大豆を盗んで食ってしまうとはにくい獣だ。ぶち殺してくれるとあってどなりますと、狐は大きにあやまってどうか許してください。そのかわりにはおまえ様に金もうけをました。させてあげますというから、それならばといて、こらえてやりますと、すぐに一頭の良い駒にばけました。爺はそれを長者の家へひいて行って、高い値に売ってお金をもうけました。

それから四、五日もすると、馬にばけていた狐はもう逃げて帰って来ました。こんどは一つ茶釜にばけてあげましょうと、まことによいころあいの茶釜になりました。爺はそれをまたお寺に待って行って、お茶のすきな和尚に売りつけました。和尚がその茶釜を炉にかけると、きいんきいと鳴ります。小僧が山に行つてその茶釜をみがきましたら、痛い痛い、小僧そつとみがけといます。これはたいへん、茶釜が物をいいました。なんのそんなことがするものかと、和尚がうんと火をたいてその茶釜をかけますと、狐はどうとうがまんがしれなくなって、熱いぞ和尚がげえと、しっぽを出してにげていったという話。(青森県の話、柳田国男『日本の昔話』 pp151-152)

#### Jp. ④ 化けくらべ

狐や狸が色々なものに化けて人をだます話は、村々でよく聞くものですが、そういう化け上手の狐や狸の中には人のように名前を持っていたものもありました。むかし、ある村にお花という狐と権兵衛という狸が住んでいたそうです。ある日権兵衛狸がお花狐に向かって、お花さんは化けるのがずいぶん上手なようだが、一つわしと化けくらべをしようじゃないか、といました。前々から化け方を自慢にしていたお花狐はこれをきくと内心たいへん喜んで、たちまち賛成をしました。そうときまれば早い方がいいから、明晩、明神様の境内で会おう、という約束をして別れました。お互いに相手をおどろかせたので、一所懸命工夫をこらしてあくる晩を待ちました。お花は、いくら権兵衛さんが化け上手な狸だといつてもとてもわたしにはかなうまいと、得意の美しい花嫁姿になって出かけました。明神様の鳥居をくぐろうとすると、そこにふかし立てのお饅頭が落ちています。いかにもおいしそうに湯気が立っているので、花嫁姿で気取って来たのも忘れ、手をのばしてお饅頭を拾い上げ、口に入れようと思いました。その時、お花さん、勝ったぞ、勝ったぞ、と饅頭が口をききました。権兵衛狸が饅頭

に化けて、日ごろ食いしんぼうのお花狐をだましたのでした。さすがの狐も時にはこのように狸に負けることもあったということです。(福島県の話、柳田国男『日本の昔話』 pp77~78)

#### 2.3. 田螺

田螺は、南米と南極大陸を除く各大陸とその周辺地域の淡水に生息し、雌雄異体の卵胎生である。したがって、日本にもインドネシアにも生息する。昔話では、一般的に弱い賢い動物として説明される。

#### Id. ④ 田螺と亀 (筆者翻訳)

ある日、あるところに川で物思いにふけて座る田螺がいました。何度も自分の運命を後悔しました。どうして自分の体の形状は友人たちと違うのかをしばしば考えて不平を言いました。友人たちはほとんどが跳躍できるし、高速で走れるし、可能な限り遊べるのですが、田螺はそれが全く出来ませんでした。早く走れないほどですから、海を渡れないのは当たり前だと文句を言いました。殻のせいで、自分が動きにくいからです。

「ああ～この背中の殻のせいで、私が遅く歩くようになってしまったのだ」と田螺はぶつぶつ言いました。

「ウウウ…。どうして私がこの形状に生まれたのかい？ どうして？ アッラー(神様)は正當じゃない！ 自分を嫌いなんだ」と叫んで泣きました。

毎日毎日そんなことを続けました。田螺は、どうしてアッラー(神様)がその形に作成したのか分かりませんでした。そのような形でたくさん可能性があることもまだ知りませんでした。実は、アッラー(神様)は自然の中で生き物毎に特別な可能性を持たせて作成しました。

ある日の午後、亀は一日中川で泳いでばかりなので、ずぶぬれになって、田螺のところに通って来ました。

「アッサラムアライクム、田螺くん。ホホホ……まだ自分自身の身の上を後悔しているのか



い？」と亀が少し冗談で挨拶しました。田螺は亀を無視しました。田螺の口は右左へ移動しながら、黙りました。誰にも話したくなかったです。

「田螺くん、どうして挨拶したのに、返事しないの？」と亀はまだ黙っている田螺を見ました。「ワライイクムサラーム！」と田螺が怒った口調で返事しました。

「へへへ……なんで誠実な返事をしてくれないの？、だけど、黙っているよりとんでもないよ！」と亀が言いました。

「田螺くん、どうして毎日毎日悲しんで、文句を言うばかりなのか？ どうしてアッラー（神様）にそんなきれいな形状を作成してもらって、少しも感謝しないの？」と亀が聞きました。

「なんと言うの！ 私がきれい？ どこがきれいなもの!! こんな形状は嫌だ!!」と田螺が悲しんで答えました。亀はそれを聞いて、ニコニコ笑いました。

「悲しんでいる友人がいるのに、なんでニコニコ笑うの？」と田螺が怒りました。

「だってさ、お前が面白いんだもん」と亀が言いました。

「そんな自分の形状が嫌で、友だちと違うから、いつも悲しんでアッラー（神様）に文句を言うばかりなのか？」と亀が確認しました。

「今分かった!!」と田螺が答えました。

「それはダメだよ、狭い心だね」と亀が確かめました。

「何！狭い心と言ったの!! それは本気なの!!」と田螺が少し怒りました。

「分かってる、けどさ、この世界中の生き物はそれぞれの可能性を持ってるよ。アッラー（神様）は何も無駄なことを作成しないよ！ お前も持ってるはずだよ。お前がいつも文句を言うばかりだから、自分の可能性が見つけにくくなったのだ」と亀は田螺に忠告しました。

「静かにしろ!!」と田螺が荒々しく言いました。

「お前は特別な可能性を持ってるよ」と亀がまた言いました。

田螺は黙りながら、亀の言ったことをしみじみ考えました。実は、亀の言ったことが間違いないと、田螺は亀の言ったことに心の中で賛成しました。今まで、いつも文句を言うばかりだから、自分の時間を無駄にしてしまったと田螺はがっかりしました。田螺は亀に感謝したいと思ったとたん、アリの子が川に落ちました。遠いところから、アリの子のお母さんが叫んだ大きい声が聞こえました。たちまち田螺は川に飛び出しました。早い水に耐えるため、自分の殻を空中に上げて、アリの子を殻の中に入れておいて、助け上げました。

川岸に着いたとき、「良かった、救助したんだね」と田螺はほっとしました。

「バンザイ……田螺くん、すごい……ヒーローだ」とアリ達が田螺を褒めました。

「田螺くん、勇気でアリの子を助けてくれて、ありがとう！」とアリ達の会長が感謝して言いました。

「いいえ、私何もしていない、ただこの殻のおかげで、アリの子を助け上げられたよ」と田螺が言いました。田螺くんの勇気のおかげで、アリの子が助けられて、この日にヒーローになりました。そこから、どうしてアッラー（神様）はこういうふうに分かたがいの体の形状を作成されたのかちゃんと田螺は理解できました。やっぱり世界中の生き物はそれぞれの可能性があって、せい一杯自分自身を持って、いつも前向きの気持ちでいれば、大丈夫だという話であります。

（ジャワ州の話、「Dongeng Untuk Anak」<http://dongeng-untuk-anak.blogspot.jp/2013/09/kisah-siput-dan-kura-kura.html>）

#### Jp. ⑤ 狸と田螺

むかしむかし、狸と田螺をさそって、二人で伊勢参りをしたそうです。旅行もおしまいの日になって、田螺が狸にむかっていいました。どうだ狸君、ただこうしてあるいていてもつまらない。これから伊勢の大神宮様まで、二人で駆けっくらをしてみようじゃないかといいました。狸もさんせいしてたくをしていますが、

田螺はすばやく貝の蓋を開いて、狸の尾のさきにちゃんとくい付きました。だからすこしも骨を折らずに、狸と同じだけにとんでいくことができました。いよいよ伊勢のお鳥居のそばまで到着しますと、狸はうれしいものだから太いしっぽを振りまわした。それが石垣の石にかちんとぶつかって、田螺の貝が半分にこわれて、田螺は土の上へころがり落ちました。ずるい田螺はみえ坊なやつですから、痛いのを我慢してこういってそうでもあります。おい狸君、遅いじゃないか。僕はさきにごこへ着いて、いま肩を脱いで休んでいるところだぜ。(和歌山県有田郡の話、柳田国男『日本の昔話』pp35-36)

## 2.4. 猿

猿はインドネシアに日本にもいる動物だが、種類は多少違うかもしれない。両国において、最もポピュラーなキャラクターと言える。

### Jp. ⑥ 猿の尾はなぜ短い

むかしむかしの昔、猿のしっぽは三十三尋あったそうです。それが熊のためにだまされて、あのような短いしっぽになってしまいました。あるとき猿は熊のうちへたずねて行って、どうすればたくさんの川の魚を、捕ることができようかと相談しました。そうすると熊がいうには今晚のような寒い晩に、どこか深い淵の上の岩にすわって、そのしっぽを水のなかへ漬けておいてごらん。きっといろいろな雑魚がきてくっつくからと教えてくれました。猿は大喜びで教えてもらったとおりにして待っていますと、夜がふけてゆくうちに、だんだんとしっぽが重くなりました。それは氷が張って来たのですが、お猿は雑魚が来てくっついたのだと思っていました。もうこれくらい捕れたら十分だ。あんまり冷たいから帰りましようと思って、しっぽを引きあげようとしたけれどもなんとも抜けません。これはたいへんだと大驚きをして、むりに引張ったところが、そのしっぽが根元からぶつりと切れました。猿の顔の真赤なもの、その時あまりに力をこめて引張ったた

めだといっている人がいます。(鳥根郡の話、柳田国男『日本の昔話』26ページ)

### Id. ⑤ 猿の尾はなぜ短い

ある日のこと、小鹿が広い野原の上に沢山の山羊が集まっているのを見ました。ところがその山羊どもは悲しそうに皆首を垂れているのです。いったいどうしたわけかと尋ねて見ると、山羊どもはこれに答えて、

「毎年私たちを一匹ずつ貢物として取ってゆく虎が、今日やって来ることになっている」といいました。

「もしお前さんたちが私を王様に選んでくれるなら、虎の災難から救ってやろう」と小鹿がいいました。

山羊どもは喜んでこの申出に賛成しました。小鹿は皆に森に行けと命じました。森へ行ったらゴムの木を探して、汁が流れ出るまでそれを突け、汁が出たらそれを角につけて来いといいました。山羊どもがめいめい角にゴムを少しずつ着けて帰って来ると、小鹿は、そのゴムを自分の肌に塗り着けさせました。それから小鹿は、アラングアラングの草の中を飛び回って、その花の蕊を体中にくっつけました。それがため彼の体は途方もなく大きくなって、ほとんど小鹿とは受け取れないようになりました。

これからかれは、野原の真ん中の一本の木の下に突っ立ちました。山羊どもはそうなることかと、彼の周りに集まっていた。しばらくすると、虎が猿を連れてやって来ました。猿はその時分はまだ長い尾を持っていました。この猿が貢取りの役目を勤めておりました。虎は木の下にいるへんてこなものを見ると、非常に驚いて、「うかうかと進んではいけない。山羊どもには王様が出来たぞ」と叫びました。

「何ですって？」と猿が答えました。

「あれはただの小鹿じゃありませんか。ほんとですよ。違いありませんよ。さあ私たちの尾を、繋ぎ合わせて一緒に行きましょう。そうすればあなただっていけないことはありませんまい」

そこで二人は尾と尾を繋ぎ合わせて進んで行きました。山羊どもはそれを見ると、心の中でもう駄目だと思いました。しかし彼らの新しい王様は、

「これはいったい何事じゃ、わしはその方に七匹の虎を連れて参れと命じたではないか、しかるにただ一匹とはどうしたわけじゃ？」と叫びました。

これを聞いた虎は猿に欺かれたと思って、びっくり仰天して、死物狂い身を振りもぎって森をさして逃げ出しました。とたんに猿の尻尾がぷつりと切れてしまいました。その時以来かわいそうな猿は、尻尾の切れっ端をちよっぴりと持つだけになりました。(西カリマンタン島の話、『世界神話伝説大系第15巻』pp4-75)

#### JP. ⑦ 貉と猿と獺

むかしむかし、貉と猿と獺の三人がつれ立って、弥彦参りに出かけたことがあるそうです。その途中で三人は拾い物をしました。その拾い物は蕨が一枚、塩が一吠と豆が一升とでありました。これをどういうふうに分けたらよいか、なかなか相談がまとまらなかったそうです。そのうちに貉は賢いからこういいました。猿さんはこの蕨を持って、山の木うえに登って広げて、ほうほうをながめたらいいじゃないか。獺さんはこの塩をどこか魚のいそうな池へ持って行ってまいて、魚を浮かせて捕ったらいいじゃないか。私は残りの豆をもらって食べようといひますと、ほかの二人はうっかりと賛成してしまいました。猿は喜んで木の上へ蕨を持って行って、それを敷いて見物をしますと、すぐにすべってしまって、猿も木から落ちました。そうして足を挫いてしまいました。獺は池をみつけて一吠の塩を打ち込み、その後から水の中に入りますと、塩水が眼にしみて真赤にただれてしまいました。これは飛んだものをしょいこんだ。ぜんたい貉がずるいからいけないと、二人で苦情をいいに貉のうちへ行きました。その間に貉は一升の豆をちゃんと食べてしまって、女房の貉と二人で豆の皮を毛の間へはさんで呻るまね

をしていました。私たちが豆を食べたらおできがたくさんできて、苦しい苦しいといひました。猿と獺とはまただまされて、それじゃお互いさまだから、仕方がないといって帰っていったそうです。(新潟県の話、柳田国男『日本の昔話』36-37ページ)

#### JP. ⑧ 猿と猫と鼠

むかしむかしあるところに、爺と婆とがありました。婆は精出して木綿を織ると、それを爺が風呂敷に入れて、ほうほうの町を売り歩いていました。ある日爺は木綿を売りに出て、ひとりで山道を返って来ると、はるか向こうの山の木に大きな雌猿がいるのを、猟師が鉄砲を持って打とうとしておりました。雌猿は手を合せて、こらえてくれという様子をして拝んでおりました。かわいそうなことをする思つてとめに行きますと、思わず鉄砲がそれて、爺は肩先を打たれました。猟師はとんだことをしたと思つてにげてしまいました。そうするとどこからともなく多くの子猿があらわれて、いっしょうけんめいに介抱をしてくれました。そうして猿の家へつれて行って、たいそうな御馳走をしたそうです。婆が心配をしているからもう帰るといひますと、猿たちがお礼に宝物をくれました。これは猿の一文銭といひて、世にも大切な宝物ですが、命の親様にさしあげます。これを祀っておくと金持ちになります。

ほんとうにお猿がいったとおりでありました。家では婆が年の暮だというのに、木綿も売らずに爺が帰って来たので、さんざんに怒りましたけれども、猿の一文銭のおかげで、わずかな間に金持ちになりました。ところが近所によくない人があって、急に爺婆が金持ちになったわけを聞いて、知らぬ間にその宝物を盗んでしまいました。

爺と婆とはびっくりして、ほうほう尋ねてみましたがどうしてもありかが知れません。そこで家に飼っている玉という猫をよんで、玉よ、猿の一文銭を三日のうちに捜し出してこい。捜し出して来てくれたら御褒美だ。捜し出さなけ

ればこれだといって、光る短刀を抜いて見せました。猫はこれをきいてすぐに飛び出して、一匹の鼠をつかまえて行ってきかせました。鼠よ、うちの爺様の宝物がなくなった。三日のうちに見つけてこい。見つけてくれるならば助けてやる。もしみつけないとしっぽまで食べてしまうといいました。鼠は食べられるとたいへんだから、三日の間近所の家々をまわって、猿の一文銭を捜しました。そうしてしまいにとりの悪者の家の箆筒のなかにあるのを見つけて、引き出しをかじってそれを取りだし、持ってきて玉に渡しました。玉は喜んで、それをくわえて爺様にわたしました。爺も婆も猫の玉も鼠もともどもに大喜びで、みながみないつまでも繁昌しました。めでたしめでたし。(鳥取県の話、柳田国男『日本の昔話』pp37-38)

#### JP. ⑨ 猿と墓との餅競争

むかしあるところの山のなかで、猿と墓蛙が出会ったそうであります。ちょうどお正月も近くなって、里ではそちこちに餅をつく威勢のいい杵の音がしていました。なんと墓どん、あの餅を一臼取ってきて食べるくふうはあるまいかと猿がいました。そこで山のなかで相談をきめて、二人はそろそろと里におりていきました。最初にはまず猿が庄屋様の背戸にきて隠れていると、あとから墓が忍んできて、庭の泉水のなかへ、どぶんと大きな音をさせて飛び込みました。餅を搗いている若い人たちはその音を聞いて、これはたいへんだ、うちの坊ちゃんが池を落ちたようだといって、臼も餅もほったちかしておいて、のこらず水のそばへ駆けてきました。そのすきに猿はうまうまと餅の臼をかかえて、山の上まではこんできました。墓もその後からのそのそと戻ってきました。

なんと墓どん、お前と二人でこの餅を分けて食うよりも、いっそのこと臼のままここから転がして、早く追いついた方がまるごと食うことにしてはどうかと猿がいました。墓蛙は足のろいから損だとは思いましたが、それでも承知をして一、二、三のかけ声とともにごろご

ろと餅の臼を谷底に突き落しました。足の達者な猿はすぐにその後から飛んでおります。墓は足が遅いので仕方なしに、のたりのたりと山を下がっていきますと、運の好いこともあったもので、餅はいつのまにか臼の中から抜けだして、道のはたの萩の枝にだらりとひっかかっていた。これはありがたしとさっそくその餅のそばにすわりこんで、墓は一人でゆるゆると食べていました。そうすると、空白をおっかけてむだ足をした猿が、がっかりしてまた登って来ました。墓どん墓どんこっちの方から先に食ってはどうかねと、見物をしていた猿がいました。なあにこりゃおれの餅だ。おれが好きな方から食おうよと、墓蛙は答えました。(新潟県の話、柳田国男『日本の昔話』39-40ページ)

#### JP. ⑩ 猿舂入り

むかしむかしある村の爺が、ひとりで山畠に出て働いていました。畠が広くてあんまり骨が折れるので、あゝあゝ猿でもよいから来て助けてくれるなら、三人ある娘の一人は嫁にやるがなあといいました。そうすると猿が一匹ひょうくり出てきまして、せっせと畠しごとをてつだってくれました。こいつは困った約束をしたわいと思って、家に帰ってきて三人の娘と相談をすると、姉も二番目の娘も、猿のお嫁には行かれませんかといって怒りました。末の娘だけがやさしい女で、お父さんが約束をなさったのなら、ぜひがないから私行きましょう。嫁入りのしたくには瓶を一つ、その中へ縫い針をたくさんに入れてくださいといいました。そうすると次の朝は、猿がちゃんと、舂様の着物をきて、約束の花嫁を迎えにきました。嫁の荷物は瓶と縫い針、これを猿の舂がせなかに負うて、なかよく話をしながら、猿の住む山へ行きました。山の麓には深い谷川が流れていて、細い一本橋がかかっていました。その橋を渡ろうとするときに、猿の舂様が話しかけました。男の子が生まれたならなんという名をつけよう。猿どのの子だから猿沢とつけましょう。女の子ができたならなんと名をつけよう。この谷には藤の花がき

れいだからお藤とつけましょう。そうって渡っていくうちに一本橋が細いので、ちょっと手がさわると猿の聲は川へおちました。そうして縫い針をいれた瓶をせおったままで、水に流されていきました。その時に猿の聲が泣きながら、こんな歌を詠んだということで、今でもその文句が残っています。

猿沢や、猿沢や

お藤の母が泣くぞかわいや。

(広島県の話、柳田国男『日本の昔話』pp41-42)

#### Id. ⑥ 猿亀合戦という話

猿と亀が友達でした。あるとき二人で庭を造って、その中にピサングの木（バナナ）を植えるようじゃないかと、相談しました。庭が出来上がると、二人はそれを二つに分けて、めいめい自分の好きなように手入れをしたり、掃除をしたりすることにしました。幾月か過ぎました。二人は毎朝決まって、庭に出掛けました。ある朝のこと、猿は友達に向かって、

「ねえ亀さん、そっちのバナナはいかがですかね？」と尋ねました。すると亀は、

「私の方のは、よく育って、もう葉が出来るところです」といいました。それから彼女は猿に、

「それじゃ、あなたの芽が出ていますよ」と猿が答えました。

ある日のこと、猿がまた、

「お前さんのバナナはどうです！」と尋ねました。

「もう丈が高くなって、きれいな葉が出ました。あなたのは、どうですか」と亀がいいました。

「僕のバナナは、全く葉なしで、ただ幹と茎ばかりだ」と猿が答えました。

猿は毎日毎日葉を摘んで食べていたのです。そのためにバナナは、だんだんと衰え始めました。亀は、自分の畑によく手入れをしますので、バナナはすくすくと大きくなりました。

こうして二人は、お互いの畑の様子を尋ね合いながら、バナナの実がなる時を待ち焦がれていました。猿は亀から聞かれると、いつも、

「僕のバナナの幹には、ほんのちよっぴり葉があるばかりだ」と答えるのでした。亀は、「私のは、もう実がなっていますよ」と答えるのでした。

ある日のこと、猿は、「僕のはとうとう枯れてしまった」といわなければならない羽目になりました。これに反して亀の方では、

「私のバナナはもう熟しましたよ」と答えることが出来ました。これを聞くと猿は亀のバナナの実が欲しくなって、

「いくら実がなっても、お前さんが樹に登れないじゃ仕方ないだろう。木登りときは僕の十八番なんだからな」といいました。

これを聞くと、亀はなるほどと思って、猿にバナナの実をちぎってもらうことにしました。ところが猿は、樹の上に座り込んで、バナナの中身は自分で食べてしまって、皮だけを投げてやりました。

これに腹を立てた亀は、竹の棒を地面に突きさして置きました。猿はたらふくバナナを詰め込んで、いよいよ下へ降りようとしていました。その時、亀が猿に呼びかけて、

「向こう側に降りてはいけませんよ。汚いものや塵芥が捨ててありますから、こっち側へ降りていらっしやい」といいました。腹一杯バナナを食べて、とくいになりきった猿は、いわれるままに降りて来ましたが、たちまち尖った棒の先に腹を突きさして、しんでしまいました。(スラウェシ島の話、『世界神話伝説大系第15巻』pp105-106)

#### Id. ⑦ 猿亀合戦後日譚という話

欺された亀は、もっと恐ろしい敵討を思い立ちました。彼女は、死んだ猿の骨を集めて、それを焼いてカルクにしました。彼女は、それを持ってたくさん猿がいる一本の高いワリンギンの樹の下にやって来ました。

「お前さん、何をもって来てくれたんだね」と猿どもは尋ねました。

「少しばかりカルクを持って来ました。バナナに替えてもらおうと思ってね」と亀が答えまし

た。

猿どもは、彼女にバナナを二つ三つ投げてやって、それからカルクを取りに降りて来ました。猿どもは、カルクを受け取ると、また樹の上に登って、それを食べては楽しんでいました。それを見ると亀が、

身内の骨とは露知らず

舌鼓打つましらども

と歌いました。猿どもは、かっとして、樹から飛び下りるなり、亀を捕えて、池の中に放り込みました。

「これはどうも忝けない」と亀は猿どもに呼び掛けました。

「私にとっては、水の中ほど気持ちのよい所はないんですよ」

これを聞いた猿どもはいろいろと相談をした揚句、牛や鹿や豚に頼んで、池の水を飲み干してもらうことにしました。それで頼まれた動物どもは寄って集って、水を飲み始めた。池の水はぐんぐん減ってゆきました。そこで亀は、海老に頼んで、水を飲んでいる動物の腹を引き裂いてもらうことにしました。

池が干上がったのを見て、猿どもはいっせいに亀に襲いかかって来ました。とたんに、海老が水を飲んでいる動物の腹を裂きましたので、たちまち、池は満々と水をたたえました。猿どもは目を白黒にして大騒ぎをしているうちに、とうとう溺れ死んでしまいました。(スラウェシ島の話、『世界神話伝説大系第15巻』 pp107 - 108)

### 3. 想像された性格の分析

昔話は子供たちに聞かせる話である。その中には様々な主人公があり、主人公としての行動が読者と聞き方に影響を与えている。ソニ・スクマワン (2014) はカンチルに注目して、次のように述べている。

様々な昔話で、カンチルは、スマート、軽快、面白い、いたずらというキャラクターを持っている動物である。カンチルは、狡猾で周りの相手をバカにするのが上手である。

昔話は娯楽だが、真実の書物、道徳的な教訓、あるいは風刺を含むものもある。インドネシアでは動物の話の場合、カンチルが最も有名な登場人物と思われる。賢いが、ずるいキャラクターと説明される。

そして、日本の昔話では狐のキャラクターが有名だと言われる。狐は知性があり、魔法の力を持っているし、長寿であると信じられている。多くの話では狐が詐欺師として様々な挑発をすると思われる。しかし、狐も約束を守り、恩返しキャラクターとしても説明される。

それらのことに基づいて、日本とインドネシアの昔話の比較を行うに当たって、まずインドネシアのカンチルと、カンチルによく似た日本の狐の比較から始めてみよう。上にあげた三つカンチルの話ではどのような行動があるか、第1表にまとめて示した。

第1表

| 動物の主人公 | 話のタイトル          | 行動                             |                           |
|--------|-----------------|--------------------------------|---------------------------|
|        |                 | 悪い                             | 良い                        |
| カンチル   | Id.① カンチルとカタツムリ | 1. 口がうまい<br>2. 我がまま<br>3. せっかち | 1. 熱心                     |
|        | Id.② カンチル王の巨人退治 | 4. 狡猾<br>5. 嘘つき                | 2. 勇気<br>3. 熱心<br>4. 誇り高い |

|  |                    |                                                                        |  |
|--|--------------------|------------------------------------------------------------------------|--|
|  | Id.③ カンチルと<br>婚礼の客 | 6. 違法<br>7. 非倫理的<br>8. 荒々しい<br>9. いたずら<br>10. 凄まじい<br>11. 狡猾<br>12. 不吉 |  |
|--|--------------------|------------------------------------------------------------------------|--|

この表を見ると、カンチルは悪い性格と良い性格を持っている。悪い性格は〈口がうまい〉、〈我がまま〉、〈せっかち〉、〈狡猾〉、〈嘘つき〉、〈違法〉、〈非倫理的〉、〈荒々しい〉、〈いたずら〉、〈凄まじい〉、〈不吉な性格〉である。しかし、カンチルは良い行動も持っている。良い性格は〈熱心〉、〈勇気〉、〈誇り高い〉がある。カンチルが多くの悪い性格を持っているが、いつも良い運命を持って

る。話の終わりにはカンチルが常に幸運である。この三つの話の中では、『カンチルとカタツムリ』という話しか、カンチルは負けていないのである。インドネシアの昔話ではカンチルが常に周りの相手をバカにしている。しかし、日本の昔話でも狐が常に周りの相手をバカにしているとよく聞かれる。狐がどのような行動を持っているか、第2表で示す。

第2表

| 動物の主人公 | 話のタイトル     | 行動                            |                              |
|--------|------------|-------------------------------|------------------------------|
|        |            | 悪い                            | 良い                           |
| 狐      | Jp.① 小僧と狐  | 1. いたずら<br>2. 恭しくない<br>3. 化ける | 1. やさしい<br>2. 後悔する<br>3. 犠牲的 |
|        | Jp.② 狐女房   | 4. 化かす                        |                              |
|        | Jp.③ 狐の恩返し | 5. 違法<br>6. 狡猾<br>7. 化ける      |                              |
|        | Jp.④ 化けくらべ | 8. 化ける<br>9. 独りよがり<br>10. 強欲  |                              |

第2表を見ると、狐は悪い行動と良い行動を持ち、インドネシアの昔話に出て来るカンチルの性格と同じである。狐が人間を犠牲にして不正な行動をする動機は、〈いたずら〉として説明されている。したがって、この表に見出した悪い行動は〈いたずら〉、〈恭しくない〉、〈化ける〉、〈違法〉、〈狡猾〉、〈独りよがり〉、〈強欲〉である。その他にも良い行動は、〈やさしい〉、〈後悔する〉、〈犠牲的〉を見出した。

狐は、その四つの話の中の二つの話（「狐女房」と「狐の恩返し」）から良い行動を見出し、ほかの二つの話からは良い行動を見出せなかった。しかし、狐が相手に化かす理由は自分の間違いを復讐するためである。それはカンチルとの違いである。

次に、インドネシアと日本に共通して出てくる田螺を取り上げよう。両国の昔話の中ではどのような行動を持っているか。第3表に示す。

第3表

| 動物の主人公 | 話のタイトル    | 行動                                      |                                      |
|--------|-----------|-----------------------------------------|--------------------------------------|
|        |           | 悪い                                      | 良い                                   |
| 田螺     | Id.④ 田螺と亀 | 1. 嘆かわしい<br>2. 無関心<br>3. 気難しい<br>4. 狭い心 | 1. 後悔する<br>2. 役に立つ<br>3. 謙虚<br>4. 勇気 |
|        | Jp.⑤ 狸と田螺 | 5. ずるい                                  |                                      |

第3表を見ると、インドネシアの昔話では、田螺は悪い行動と良い行動を持っている。それは〈嘆かわしい〉、〈無関心〉、〈気難しい〉、〈狭い心〉という悪い行動であり、良い行動としては〈後悔する〉、〈役に立つ〉、〈謙虚〉、〈勇気〉を持っている。逆に、日本の昔話には良い行動が見出されなかった。田螺の持っている悪い行動は〈ずるい〉である。

もう一つ共通して登場する動物として、猿を取り上げよう。猿は一般的インドネシアと日本でも賢い動物と言われるが、両国とも、理解力が低いという意味の蔑称として用いることがある。では、両国の昔話の中ではどのような行動を持っているか。第4表に示す。

第4表

| 動物の主人公 | 話のタイトル                         | 行動                                      |                                      |
|--------|--------------------------------|-----------------------------------------|--------------------------------------|
|        |                                | 悪い                                      | 良い                                   |
| 猿      | Jp.⑥ 猿の尾はなぜ短い                  |                                         | 1. 素朴<br>2. 同情                       |
|        | Id.⑤ 猿の尾はなぜ短い                  |                                         | 3. 同情                                |
|        | Jp.⑦ 貉と猿と獺                     |                                         | 4. 同情                                |
|        | Jp.⑧ 猿と猫と鼠                     |                                         | 5. 同情                                |
|        | Jp.⑨ 猿と蟻との餅競争                  | 1. 違法<br>2. 狡猾                          | 6. 尊重<br>7. 同情                       |
|        | Jp.⑩ 猿聲入り                      |                                         | 8. 役に立つ<br>9. 優しい<br>10. 同情          |
|        | Id.⑥ 猿亀合戦・<br>Id.⑦ 猿亀合戦<br>後日譚 | 3. 怠惰<br>4. うらやましい<br>5. わがまま<br>6. ずるい | 11. 同情<br>13. 素朴<br>14. 忠実<br>15. 同情 |
|        |                                |                                         |                                      |
|        |                                |                                         |                                      |
|        |                                |                                         |                                      |



この表では猿の行動は〈素朴〉、〈同情〉、〈尊重〉、〈役に立つ〉、〈やさしい〉、〈忠実〉の良い行動を持っている。悪い行動は、日本の「猿と墓」とインドネシアの「猿亀合戦」という話しか見出されなかった。それは〈違法〉、〈狡猾〉、〈わがまま〉、〈うらやましい〉、〈怠惰〉、〈ずるい〉の悪い行動である。その5つの日本昔話と三つのインドネシア昔話に共通して、猿の結末が可愛そうであるという点も見出された。

#### 4. 結論

昔話は特定の文化を持っている作品であり、特

定の教育的効果を持っているとソニ・スクマワンが述べている。子供たちは周りの環境から学んで成長している。見て聞いたものを模倣している。子供が悪いことを見たり聞いたりすれば、悪いことを学び、真似をし続けると悪い性格になる。逆に、良いことを見て聞いていれば、それを真似し続けると良い性格に成長することになると思う。それは、森光義明・関聡（2015）が、物語との出会いは豊かな感情、特に道徳性の芽生えを育成する出発点になり、特に「美しいものとの出会い」が感情性として育つことになると述べていることと一致する。本研究の取り上げた昔話から、道徳性に関してまとめたものを第5表として示した。

第5-1表 主人公の悪い行動表

| 悪い行動   | 主人公  |     |    |   |
|--------|------|-----|----|---|
|        | カンチル | きつね | 田螺 | 猿 |
| 口がうまい  | ○    |     |    |   |
| せっかち   | ○    |     |    |   |
| 我がまま   | ○    |     |    | ○ |
| 狡猾・ずるい | ○    | ○   | ○  | ○ |
| 嘘つき    | ○    |     | ○  |   |
| 違法     | ○    | ○   |    | ○ |
| 非論理的   | ○    |     |    |   |
| 荒々しい   | ○    |     |    |   |
| いたづら   | ○    | ○   |    |   |
| 凄まじい   | ○    |     |    |   |

|        |   |  |   |   |
|--------|---|--|---|---|
| 不吉     | ○ |  |   |   |
| 恭しくない  |   |  | ○ |   |
| 化けにする  |   |  | ○ |   |
| 独りよがり  |   |  | ○ |   |
| 強欲     |   |  | ○ |   |
| 嘆かわしい  |   |  |   | ○ |
| 無関心    |   |  |   | ○ |
| 気難しい   |   |  |   | ○ |
| 狭い心    |   |  |   | ○ |
| 怠惰     |   |  |   | ○ |
| うらやましい |   |  |   | ○ |

第5-2表 主人公の良い行動表

| 良い行動 | 主人公  |     |    |   |
|------|------|-----|----|---|
|      | カンチル | きつね | 田螺 | 猿 |
| 熱心   | ○    |     |    |   |
| 勇気   | ○    |     | ○  |   |
| 誇り高い | ○    |     |    |   |
| 優しい  |      | ○   |    | ○ |
| 後悔する |      | ○   | ○  |   |

|      |  |  |   |   |
|------|--|--|---|---|
| 犠牲的  |  |  | ○ |   |
| 役に立つ |  |  |   | ○ |
| 謙虚   |  |  |   | ○ |
| 素朴   |  |  |   | ○ |
| 同情   |  |  |   | ○ |
| 尊重   |  |  |   | ○ |
| 忠実   |  |  |   | ○ |

この表を見ると、カンチルはだいぶ悪い行動を持っているが、熱心、勇気、誇り高い動物である。頭が良いし、運を持っている。しかし、周りを欺いている。カンチルの悪徳は、周りの人にも自分にも悪い意味合いを持つものとして表示される。しかし、その主人公から子供に大胆、情熱、誇り高い性格が教えられる。インドネシア人の子供たちは、その話から悪徳と美徳を知って学ぶことができる。

その話の道徳的なメッセージは、聞き手と読者に、日常生活の中でどのような良い道徳性を体験し、理解するかを教える。日本人の子供達の場合にも、狐の昔話から悪徳と美徳を知って学ぶことができる。狐はだいぶ悪いイメージと思われている。それはカンチルと同じ点である。インドネシアのカンチルと日本の狐は、様々な悪い性格と良い性格を持っている動物である。

他の主人公の田螺と猿は、同じ行動を持っている。インドネシアの田螺は弱いものだが、勇気を持ち、最後の話ではアリの子を助けてあげている。逆に、日本の田螺の場合は、狡い性格を持ち、狸を化かしたという話である。弱いものだが、優しい狸を化かした。その話は、弱いものが常に可愛そうであるだけでなく、珍しい可能性を持っているかもしれないし、あるいは、弱いのに悪い行動をする可能性もあることを示している。

そして、猿の話の場合は、5つの日本とインドネシアの猿の話のうちで、「猿と麩との餅競争」と「猿亀合戦」しか悪い行動を持っていない。全体の猿の話は、可愛そうな話ばかりである。素朴な性格をしているが、結末では常に運が悪い。

この比較に基づき、日本語学習者のための日本語教材としても使うことができると思う。昔話を聞くのが好きなのは、子供達だけでなく、一般的な大人も同じだと思う。昔話を聞きながら成長したという経験をみな持っている。

昔話は何回も聞かれれば、子どもたちに価値観や倫理観を鼓吹するために非常に効果的な媒体である。次の段階として、外国語学習に導入するための媒体としても使用することができる。それだ

けでなく、日本文化の知識や習慣を構築することも出来ると考察する。この結果、教育教材としての昔話を設けた場合、両国の文化を相互理解したり、文化間の誤解を減らし合ったりすることができ、日本語学習者として豊かな言葉を増やし、昔話を通して様々な動物に関する文化の違いを学ぶことができることが本研究を通して明らかになった。

### 参考文献

- 柳田国男 (2014) 『日本の昔話』 角川書店
- 松村武雄 (1979) 『世界神話伝説大系第15巻』 名著普及会
- 森光義明・関聡 (2015) 「道徳性を育む日本昔話の教材化」久留米信愛女学院短期大学研究紀要、第38号
- 東京外国語大学ウェブサイト「インドネシアの部屋」  
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/cerita/index.htm>
- Cerita dan Dongeng <http://guruceritaku.blogspot.jp/2014/09> (2015年7月13日)
- Dongeng Untuk Anak <http://dongeng-untuk-anak.blogspot.jp/2013/09/kisah-siput-dan-kura-kura.html> (2015年12月23日)
- Sony Sukmawan (2014) 「Representasi Budaya Jawa dalam Dongeng Si Kancil」、[http://fib.ub.ac.id/SastraJepang/?page\\_id=1705](http://fib.ub.ac.id/SastraJepang/?page_id=1705) (2016年1月12日)
- Yuliani Rahmah (2007) 「Dongeng *Timun Emas* (Indonesia) dan Dongeng *Sanmai No Ofuda* (Jepang)」 *Studi Komparatif Struktur Cerita dan Latar Budaya* <http://docslide.net/documents/dongeng-timun-emas-55ab5865bf560.html> (2015年12月27日)

[付記] 著者のバリタ・マシリアー氏は、インドネシアのバンギル第一高等学校で日本語教師として勤務しており、平成27年度国費外国人留学生(教員研修留学生)として岩手大学教育学部で、一年間、日本語と日本文化についての研修を行っ

た。特に、大野眞男（国語教育科教授）を指導教員として、日本語教育一般や言語文化の対照研究についての研究を行った。本論文は、上記研修の成果の一部である。（大野眞男、記す）